

〔翻 訳〕

『スペクテーター』(15)

——第136号から第145号——

門 田 俊 夫

第136号 1711年8月6日(月曜日)

【スティール】

パルティア人の虚言もかたなし。(ホラティウス)¹⁾

一風変わった方から要請を受けましたので、本日はその手紙を掲載したいと思います。

拝啓

前置きも弁解も申し上げませんが、小生は、現在もそうなのですが、若いときから一貫して、我が国始まって以来の大嘘つきの一人だと自負しているのであります。これに関しては、これまででありとあらゆる道德家の書物に目を通して来ましたが、数々の講話も小生にはいっこうに効目がありません。効目があるどころか、新たな意見や考えを知って、小生の不幸はさらに一層募り、小生の言葉遣いに拍車がかかるのです。そして、時々、あり得ないことでももっともらしく思わせてしまう小生の才能の一部と化してしまいます。このように小生にはどうすることもできない虚言癖がありますため、正直に心から信じあえる友人は一人もいません。小生は妄想に駆られ、何事につけても、小生の脳裏には、直ちに胸をわくわくさせるような情景が浮かんでしまいます。そして、初対面の人にも正体を見破られるのは十分承知の上なのですが、ありもしない作り話を口にせざるを得なくなるのです。

話題がポルタヴァの戦い²⁾に及んだとき、小生は、モスクワ生まれの商人で、会計帳簿に記載できないほど資産のある親族の話を口にせざるを得なかったのです。彼は自国に活躍の場が生じたとき、志願兵として皇帝に同行しました。血気盛んなこの若者は、ここぞというときに、スウェーデンの將軍を馬から振り落としました。彼のこの兵士顔負けの活躍は、モスクワっ子たちの士気を高めました。そして、夜が明けるまでに援軍を送り込まれるきっかけを作ったのでした。この

1) ホラティウス『書簡詩』2.1.112.

2) 1709年7月8日、スウェーデン王カール12世は、ポルタヴァの戦いでロシアのピョートル大帝に敗れた後、約3百名の部下と共に、ボリステネス川を渡りベンダーに逃げ込んだ。そしてトルコに保護を求めた。

こと以外にも、彼はパイパー伯³⁾を捕虜にする好運に恵まれました。我が従兄弟はこのような情熱の持ち主ですが、その一方で、このうえなく礼儀正しい人物なのです。彼はでしゃばって武勇を見せびらかすようなことはしませんし、ありとあらゆることにも並外れた才能を発揮します。(このポケットに入っているのですが) 彼から手紙を何通かもらっていますが、そこには小生にはよく分かっています皇帝の人柄のことが書かれています。実を言いますと、小生は皇帝陛下がデトフォード滞在中に、週に二、三度、陛下と同宿したことがあります。⁴⁾さらにひどいことに、どうすることも出来ないのですが、小生は、機知とかユーモアとか関心を引きたいとかその他どんな動機もないのに、どんなことでも何らかの嘘をつききっかけにしてしまうのです。先日、ある人物が高名で学識のある聖職者のことを賛美していたとき、小生は、あんなに公明正大な方でなければ、もっと尊くみえるのだが、と言ってしまったのです。賛美していた人物が微笑んだのを憶えています。その後、その紳士に出会いましたが、むっとした表情を見せます。毎日誰も小生のことを信じてくれないとあてこするのですが、事態はいっこうに好転しません。先日もウィル・コーヒーハウスで旧友に出会い、彼に話し掛けました。するとその友人は返事をするそぶりも見せず、つぎのように小生に言いました。「雄弁家キケロの知人は、返事を聞かずに続けて二、三度、まさしく今月で40歳になるのだとキケロに言ったのです。すると、キケロは、この10年間君が毎日言っていたことを私が信じないとすると、きっと君は私のことをこのうえなく疑り深い人物と思うことだろう、と答えたのです。」と。⁵⁾この点で困ったことは、小生は面前で語られているあらゆることに口を挟みたくなるということなのです。このため、いろいろ不都合な目に会います。でも実際には、小生は意地が悪い訳ではありませんし、他人の不利益になるようなことは口にしませんので、不都合な目に会うことはそれほど頻繁という訳ではありません。あからさまに中傷することはありませんが、結果としてそうなることがあります。というのは、小生は、しばしば年長者に真に迫ったしかじかの表現を口にさせるからです。ある人物が、小生の聞いているところで、だれそれは物事が少しも分かっていない、と言っているとき、小生は即座に、さてさてこんな時にそんな人物のことを引合いに出すのはいかながなものですかねなどと言ってしまったのです。小生はこういった正真正銘のお間抜けさんが口にする一言一言を待ち構え、その都度口出しするのです。その結果、その人は必要以上に物笑いの的になってしまう訳です。かつて小生はこの生意気な気質を改めようとして、丸一週間口を開かないことにしました。口は確かに開かなかったのですが、誰かが発言していることに、何度もまばたきをしたり顔を歪ませました。そこで分かったのですが、小生は単に我慢しているだけであって、胸中では、あらゆる人に嘘をついてい

3) カール12世のもとで第一大臣を務めたパイパー伯のこと。彼はポルタヴァの戦いで捕えられ、シュルッスブルクの要塞に移送され、1716年その地で亡くなった。

4) デトフォードはロンドン近郊の旧自治区。ビョートル大帝は1698年の春にこの地に逗留したことがあった。

5) トマス・ベイリー『金言集』(1658年)。

るのです。貴殿にはあることを分かっていたかなくてはなりませんが（これは小生の生き方を考慮すると、貴殿はきっと残念なこととおっしゃることでしょうが）小生は今までに一度も外国に行ったことがありません。でも、かりに外国に行ったことがあったとしても、見知らぬ人たちを前にして、外国のことを今ほど訳知り顔で喋れたかどうか定かではありません。ドイツの宿について悪態をつき、ヴェニスの売春宿やフランスの自由な交際を褒め称えるのです。小生はロンドンから50マイルと離れたことはないのですが、ローマでは枢機卿の愛人と密通したために三日三晩刺客に付きまとわれたことがあるのです。

この種の例には事欠きませんが、観察者殿、私たちのような人物がこの町、つまり、ロンドンおよびウェストミンスター市には20人ないし30人は下らないことは確かです。要するに、私たちだけでひとつの集まりを結成するのに十分な数が揃っている訳です。私たちの言うことは信じて戴けませんので、何卒貴殿のお力で、私たちが互いに信用も信頼もする必要がないという規則に基づいて会合が持てるように、この手紙を活字にして下さいますようお願い致します。「嘘つき」という言葉はあまりにもきびしいものですから、もしよろしければ、私たちのことを「歴史家」と呼び下さい。そして、今後会員が世間から悪し様に扱われないために、貴殿からこの手の人物について若干の説明を戴き、私たち歴史家が苦しまないようにして戴きたいものと切にお願い致します。私たちは、よくある嘘つきとか口論を煽る人物とかペテン師とか煽動者たちに囲まれると、ごく普通の想像力の持ち主なのですから。この件で貴殿からご教示を戴くために、貴殿には、歴史家というものは、人と交わっているときにはありきたりの出来事には満足できないほどの、ひとえに想像力のたくましい人物だということをお分かり戴きたいものと思います。私たちの種族に属する上流人士をひとり知っています。キケロの洒落に従うと、彼は43歳の坂を越えていますが、この数年間というもの空想の虜になっています。彼にちょっとしたきっかけを与えて下さい。そうすれば、彼はあるときあるところで起った出来事について、だれそれがいてその後どうなったかなどとことこまかに語ってくれることでしょう。彼は自分のことを口にする場合には驚くほど控え目に喋るのですが、それ以外のことでは、申し分のない言葉遣いで、洞察力鋭く、誠意溢れた調子で語り、聞く人たちになるほどと思わせてしまいます。いやはや、これを嘘つきといえるでしょうか。差し出がましいところは何一つありません。にもかかわらず、このうえなく真面目で、威厳のある崇高な顔つきをしています。歴史家をもう一人挙げるとしますと、ある若者があがります。この若者はこの資質を自分のものにしたいと念願していますが、私たちは彼のことは、子供を安全なところに置いておくために、物の道理が分からないうちに学校にやるように、そっとしておきたいと考えています。彼はまったく根も葉もないことを喋り、相手を満足させることも不快にさせることも出来ませんが、意味もなくただただ時間塞ぎをするのは得意です。ただ、彼は気立てがよく、何かを喋っていること、つまり、人々をもてなすのが好きなのです。

殺戮をしないで大層なことを成し遂げたことのある軍人のことを取り上げることができます。

この軍人は頭の回転は桁外れに鈍いのですが、彼の口にはいつも嘘ばかりです。従って、私たちとしては、彼は欠かせない存在となっています。

もう一人例を挙げさせて下さい。この人物は恋をしています、もし万一彼と愛人との関係が少しでも世間にもれると、この世で最も悩み多き人物となります。だが、彼は自らを慰めます。「こん畜生、あのあばずれの侍女め。金で片が付けられるなら、何とかしてやるのだが。もっとも、地所はすべて抵当に入っているがね。これはアントニオとクレオパトラだよ。まさしく『恋ゆえに』⁶⁾だ。」

それから、取引所の誠実な商人インディゴがいますし、損得勘定ばかり気にかけている私の召使もいます。風袋算定法もあります。この世の中、嘘だらけなのです。彼は途方もない情報通ですので、フランス人のやっていることはすべて分かっていますし、私たちが意図していることも、どうすべきかということも分かっています。彼は色々なところから情報を入手する訳です。ところが、ああ、私はどちらに向かって進んでいるのだろう。私がばやいているとき、貴殿に指摘しているとき、このばやきも指摘もすべて嘘なのです。いかにも知り合いであるかのようにして、これまで話してきた上流人士も恋をしている人物も軍人も商人も、この世にはいないのです。だが、せめて生涯に一度は嘘を言うのをやめて、すなわち、真実を口にしたいと考えています。

敬具⁷⁾

第137号 1711年8月7日（火曜日）

【スティール】

召使はその気になればいつだって恐れ、喜び、悲嘆に暮れることはできるが、主人はそういう訳にはいかない。(キケロ)¹⁾

定めとして人に仕えることを余儀なくされている人たちから、自分たちに許されている幸せさえも主人が認めてくれないといったさまざまな苦情を知することは、私にとって大きな関心事となっています。²⁾確かに、こういった不幸な投稿者が伝えていますように、世の主人の中には、召使の嬉しそうな表情を見ると気分を害し、召使が目の前で最大限の畏敬の念を払わなければ、その召使は自分を遠ざけているのだと考えてしまう人がいます。ある召使に言わせると、満ち足りた表情をしていると、主人からどうして今朝はそんなに元気がよいのか、と尋ねられ、少々不機嫌な表情をしていると、おいおい、手当は貰っていないのかい、と言われるとのことです。この

6) ドライデンの作品。第92号にも登場した。

7) この手紙の主については、スティールはコルネイユの『うそつき男』（初演1634年）をベースにした『恋するうそつき男』（1704）の若者ブックウィットで同じような人物を登場させていた。

1) キケロ『友人宛書簡集』11.28.3.

2) 主人と召使の関係については、第88号、第96号、第107号でも触れられている。

衰れた種族は非常に惨めな人生を送っている訳です。主人はどうしたら敬意払ってもらえるかその方法が分からないし、召使は召使で敬意の払い方が分からないのです。つぎに登場する人物は気質があまりにも陰鬱であるため、好運に恵まれているときでもほとんど満足感を覚え、自分の100分の1の収入で暮らしている人が満ち足りた表情をしているとひそかにやきもきする、つまり、すべてを所有していても不幸に感じてしまう人物のようです。自身の心を御することが出来ない心の不安定な人物は、不機嫌のあまり周囲の人みんなにあたりちらすもののなのです。つぎの2通の手紙を見ていただければ、そのことが見事に表れていると思います。

1711年8月2日

拝啓

先月3日の貴紙を拝見しました。そして、サー・ロジャーのような立派な主人にお仕えできたらとても幸せだろうなと思った次第です。私の主人の人柄は、あの善良で穏やかな勲爵士様のまきに正反対なのです。指示にしても、心のあり方にしてもすべて逆です。何かを伝えるような場合は、私の主人は独特の眼差しで声を荒げて、「すぐに忘れるに違いない」と言います。急いで帰ってこようとすると、「2時間は無理だな、きっと途中で誰か仲間のところに立ち寄るに違いない」と言います。さらにもうひとつ、主人の人柄を見事に示す例があります。彼は私に何か仕事をやらせるようなとき、自分でもその仕事はどう考えても半日はかかると分かっているながら、15分間に10回はもうできたかと尋ねるのです。以上が私の主人のやり方です。そして、この同じようにひねくれた点が、その時々で変化しますが、主人のすべての所作に行き渡っています。このほかにも、主人は非常に疑り深い人物ですので、甘んじてスパイという嫌な仕事を引き受けます。主人自身、召使たちと同様に不幸です。彼は絶えず私たち召使を監視しています。そこで、楽しみと自由という点では、私たちはまるで看守と囚人の関係にあります。彼は罟を仕掛けて私たちの過失を待ち構えています。そして過失を発見するや否や、口汚なくののしります。その品のなさといったら、自分に向けられているそのことよりも、主人の口から発せられているそのことに恥じらいを覚えるほどです。以上が、私がこの9年間仕えてきた主人の人柄に関する概略です。これまで私は主人を不当に扱ったことはありませんが、実を言いますと、主人を満足させることにはさじを投じているのです。主人の書斎にあるクラレンドンの『大反乱史』から一文無断で借用させて戴きますなら、私の置かれています状況は、一言で言えば「不当な扱いを受けていますので、以前ほど報いを受けることは気にならなかった。」³⁾ということになるでしょう。

敬具

従者ラルフより

拝啓

3) クラレンドン卿が当時会計局長官だったウェストン卿のことを語ったもの。クラレンドン (1609-74) は初代クラレンドン伯爵のこと。

私はある貴婦人の侍女の元で仕事をしている者です。つまり、私は貴婦人と侍女のお二人に仕えていることになります。そういう訳ですので、お二人のことが貴紙に取り上げられますと、大層光栄に存ずる次第です。奥方は何を考えられているかさっぱり分からない方です。そのため、侍女はたちまち右往左往することになります。奥方はご自分をどう扱えばよいか分からないのです。その日に着る服でも、決まるまでには、色々な服をとっかえひっかえ何度も着たり脱いだりします。私は部屋の隅に控え、侍女に服を渡す係です。奥方の要請があると、私がそれを聞き届け、部屋の半ばまで持参します。すると、侍女がそこまで受取りに来ます。その瞬間、奥方はこれは駄目だと言います。そこで、私は引き返し、また違う服を持ってきます。侍女はそれを奥方のところまで運びます。今度は、奥方が身につけます。またたくまに2、3着は脱いだり着たりします。侍女と私は走り回ります。私は服を一杯抱えて持っています。すると、奥方はどれも嫌だと言います。私たちほど退屈な人たちはいませんが、奥方ほど不幸な人もいません。なぜなら、いつになっても身繕いができないのですから。このような次第で、私たちはなすすべもなく突っ立っています。一方、貞淑な奥方は、精一杯我慢して、単純明快に、私たちの飲み込みが悪いので、痼癪を起しそうだと言いながら、再び服を着はじめます。そして、私たちが自分たちでやるべきことをやっているか確かめます。奥方は身繕いができると、食事に出掛けます。そして食事が嫌になると、四頭立て馬車を要求します。すぐに馬車に乗ることもありますし、そうでない場合もあります。また、四輪軽馬車を要求することもあります。さて、貴方にお願ひですが、つむじ曲がりの貴婦人に仕える私たち召使のために、時間の余裕がなければ、何一つできないのだということ、そしてまた、用事を言い付かった場合、何も手に付けないうちに呼び返されても引き返すことはできないのだということを、是非紙上にて明らかにして下さいませんか。どうかこの女主人にしてこの召使ありということをこういった貴婦人に分からせてあげて下さい。

敬具

忍耐の人ギディーより

なるほど以上2通のケースは大きな不幸ですが、先日チェルシーに向かう途中、広場で、⁴⁾私は以上のお二方よりももっと愉快的「暴君」を見掛けました。チョッキの前をはだけた太ったお方が息を切らしながらせわしなく歩いていき、その後ろから14歳の少年が外套、上着、帽子、髪そして剣を抱えて追っかけていました。可哀相な少年は重くて今にも倒れそうで、主人に追いつくことが出来ませんでした。主人の方は百メートルほど進むたびに後ろを振り向き、小僧はなんでこんなにのろいのかといぶかるのでした。

指図ということを考える場合、指図を出す側は目下の人の立場に立てないという非常に奇妙なところがあります。だが、(落ちぶれたとしても、他人に雇われることのない)人物がどうしよう

4) ロンドンとチェルシー間の開放地のことで、この中をキングズ・ロードが走っていた。

もない役立たず者に困っていると嘆くのはよくあることです。

自分自身および自らの熱情を抑制できない人は相應しい主人にはなれないというのは、おそらく、あまりにも一般的な生活からは掛け離れていることでしょう。言動が沈着冷静でバランスがとれていることは、容易に家族全員に浸透します。私の知る限り、パンフィリオのところは最も幸せな家族です。このことはすべて、召使たちは彼の召使だからというだけでなく、一人一人が人間を尊重するという彼の考えで遇されている結果なのです。たまたま召使が自分のことに気を取られて、主人の関心事に注意を払えないようなときがあっても、彼は思いやりがあり、召使の立場に立って物事を考えることができます。先日食事をしているときに、従僕が少ないことにわびを入れたのは、まさに彼らしい振舞いだと思います。彼は「一人は妹の結婚式に出掛け、もう一人は父親を2日前に亡くしたばかりなので都合が悪いのです。」と言ったのです。

第138号 1711年8月8日(水曜日)

【スティール】

彼は単純明快な訴訟事件に、不必要な証人をたてる。(キケロ)¹⁾

時々、明確な事柄の説明をする場合に、あらん限りの知識を披露し、事態をもつれさせる人を見掛けることがあります。キケロは、將軍は部下がいなければ輝かしい仕事は成し遂げられないのだということを立証するために、数ページ費やした著述家のことを書き残しています。その著述家はまた、国の司祭にしても国外の指揮官にしても手足となって助けてくれる人がいなければ何一つできないと断言したようです。その場合、彼はテミストクレス、ペリクレス、キュロス、およびアレキサンダー大王の例を挙げます。この將軍たちにしても部下がいなかったら、あれほどのことは出来なかったのだと言います。²⁾闘う相手がなく、勝利なくして勝利を収めるこういった人物を見るのはとても愉快なことです。

キケロが引合いに出すこの著述家は、いつまでたってもとても滑稽な目で見られますし、私たちも日々これに類した、確実に相手をわずらわせている人物に出くわします。私がいつもこの種の驚きを持って見ている人としては、よくある話のうまい人がそれに相当します。こういった人たちは、どんなこまかいことでも、それが本筋であろうとなかろうと事実とこだわることに細心の注意を払います。先日同席の光栄に浴したある紳士は、ある機会を捉えて、チャールズ王の時代のことだが、同種のことで才気煥発な人物が口にした実に見事な当意即妙の応答を覚えていると語りました。(この話を始めるとき、彼が言ったのですが) 私はオーツの陰謀事件³⁾があったと

1) キケロ『義務について』2.5.16.

2) キケロ『義務について』2.5.16. テミストクレス (527?-460B.C.), ペリクレス (490?-429B.C.), キュロス (600?-529B.C.) はそれぞれギリシアの政治家。

3) タイタス・オーツ (1649-1705) による1678年のカトリック陰謀事件のこと。チャールズ2世を暗

きのことをよく覚えている。従兄弟と私はホルボーンの「ベア」にいたときのことだった。いや、私はそこではなく、「鍵十字」にいたんだ。確かそこにはジャック・トムソンが同席していた。彼は応対した紳士と親しかったのだから。どこかその辺りだったのは確かだと思う。なぜなら、私たちは毎晩その近辺で一杯やっていたのだから。でもどうであれ、事態は変わらないけど。

肝腎なことは何も言わず、いつまでもお門違いなことを言い続けているこの奇妙な頭の回転にあきれて、部屋を出て行こうとしたとき、相変わらず彼はどうしてもよいことを喋り続けていました。私よりも我慢強い人たちを相手にして、彼が当意即妙の応答をした人物と自分との関係だけでなく、自分の家柄までも喋ったのは確かなところですよ。

時間を大切にしている人にとっては、今日は何曜日だといったことにまで正確を期す人に付き合わされるのは、大きな災難となります。よくあることですが、これが権威を帯びる場合には、この災いは増大します。そうです、私はこの手の人物が一度ならず説教壇に立ったのを見たことがあります。ティロットソン博士やベヴァリッジ博士⁴⁾を非常に崇拝しているある人物は、必ず、異論の出ようもないこの偉大な人物の著作を引用しました。ある日、この人は要点に触れようとして、かの優れた聖職者に従って大切なことを取り上げましょう。そうです、二折判160頁の説話第15の「まず最初に福音について簡単な説明します。その後で、そこに含まれている問題点について考えましょう。」と語りました。

この誠実な紳士は、わざわざ謙遜して「大切なことを取り上げる」という彼の意図を「簡単な説明」に改める必要はなかった、と思われることでしょう。だが、事実そうしたのです。そしてその権威だけでは物足らないと考え、自分のやり方を強化するために、もう一人引用したのです。敬虔で学識のあるベヴァリッジ博士の第9巻4頁によると、「今私が朗読した福音を出来るだけ分かり易く説明したいと思います。それに基づいて、みなさんと一緒に考えてみたいと思います。」と付け加えたのでした。この学者牧師さんは、彼のことを知らない教区民から、大変な読書家の非常に優秀な牧師さんだと思われていました。また非常に謙虚なお方なので、自分の才能は誇示しないのだと思われていたのです。

誰にも否定できないことを口にするこういった巧妙な紳士と同列に並ぶ者に、取るに足らぬことを取り上げる積りはないのだが、たえず争う余地がほとんどない事柄で異論を差し挟むことに腐心している人たちがいます。誰かが今朝9時にだれそれさんが砂利採取場⁵⁾の方に向かっているのを見掛けたと言うと、このタイプのある人は、誠に失礼なことで、あなたと言ひ争いたくないのですが、その方には9時にセント・ジェームズでお会いしましたと言うのでした。このタイプの人が知識に溺れると、雪は白いということを証明しないと気が済まなくなり、自然界には色彩といったものはないのだと言います。要するに、このタイプの人は、ほとんど知らないことで

殺してカトリック復活を企てたという事件で、無実の人35人が処刑された。第57号参照。

4) セント・アサフ主教ウィリアム・ベヴァリッジ (1637-1708) のこと。

5) 砂利採取場はケンジントンにあった。

もすぐに疑いを差し挟みます。つまり、こういった人たちは、何事につけ、常に、馬鹿げた争う余地のないものにしてしまう能力を備えている訳です。お門違いで厄介なこの二種類の議論好きな人たちについて、皮肉屋は「一方は雄羊の乳を搾っており、もう一方は手桶を支えているのだ。」と表現しました。

広告

扇の使い方に対抗するこのうえなくお洒落な身のこなしのかぎタバコの吸い方を教えます。⁶⁾ 極上の香り高いタバコを用意してお待ちしています。場所はストランド、ボーフォード・ビルのコーナー、香料商チャールズ・リリー。⁷⁾ さらに、取引所の若き商人の方たちのことを配慮して、ギャラウェイ・コーヒーハウス⁸⁾ そばの「玩具店」では、土曜日を除く毎日、正午の2時間教授します。教授する内容としましては、かぎタバコ入れの扱い方、親密さの度合いによって異なるのですが、訪問客とか友人とか恋人を前にしたときのかぎタバコの吸い方、さらに、慎重な吸い方、冷笑的な吸い方、策を弄した吸い方、不機嫌な吸い方および各人に相応しい物腰などなどです。
[要注意] 最近訓練を終えて活動中の扇連隊に対抗して、この香料商がまたたくまに正規のかぎタバコ部隊を組織して、武装蜂起したのは間違いのないところです。

第139号 1711年8月9日(木曜日)

【スティール】

真の栄光は、定着し、伝播する。でっち上げられた栄光は、花のように、素早く滅びてしまう。作り物は何事も長続きしないのである。(キケロ)¹⁾

人生に伴うあらゆる感情のうちで、最も熱烈なものは栄光を大切にする気持です。この気持が君主に啓発されると、最高の善として結実する場合がありますし、逆に、いかんともし難い悪を招来する場合があります。君主が栄光を大切にする気持を頭でしか認識していない場合は、気高い心というよりはむしろ、野心を生み出すことになります。ところが、それが君主の持って生まれた気質に根差す場合は、その君主は真に栄光あるものを追い求めることになるのです。(「偉大」という言葉の通俗的な意味に従いますと) 現在、ヨーロッパで最も偉大な二人の人物といえ、フランスのルイ14世とロシアのピョートル皇帝²⁾です。高名というものがすべて美德の実践か

6) 第134号のベンジャミン・イーザーへの返答と思われる。

7) これによってリリーが注目され、彼はひと財産築いたと言われている。

8) ギャラウェイ・コーヒーハウスは王立取引所近くのコーンヒル、エクステイナージ・アレーにあった。このコーヒーハウスにはシティーで商売をしている裕福な人たちが出入りした、とデフォーが語っている(『イングランド周遊記』1.174.)。

1) キケロ『義務について』2.12.43.

2) ピョートル大帝は第136号にも登場する。デフォーも1723年にピョートル大帝について書物を出版した。

ら生まれていないのは確かなところですので、この君主たちの栄光をつぶさに検討し、空虚で消滅し馬鹿げたものと手堅く永続的で重要なものとを識別することは、愉快な楽しみとなるものと私は考えます。フランスのルイ王は、幼年期に如才のない人たちの世話を受けました。この取り巻きは、領土の拡大を権力を誇示する最も輝かしいしるしと考え、高名が流布することがそのまま名誉が授けられたものと誤解しました。若き君主の心は、こういった取り巻きとの交わりから、たやすく虚飾を好むようになりました。そして、不当な考えに基づいて、侵略、略奪、殺害および戦争に伴うあらゆる犯罪行為といったその考えに似つかわしい企てを立てたり、同意したりしました。同時に、この専制国家では科学芸術が奨励され、まるで才能に恵まれた人が他の人々たちを大虐殺しても構わないかのようなありさまでした。フランスの宮廷が最初の図案に基づいて打ち立てた上部構造はすべて、偽りの基礎に似つかわしいものとなりました。一人の女性を愛する高潔な気持ちは、すべての女性に対する慇懃な態度に変わりました。富の誇示、見栄を張った装飾、貧困への羞恥心、厚かましきといったことが、あたりまえの処世術となりました。男性同士の交友関係は、利害の結びつき、要するに、単なる仲間の関係に過ぎなくなりました。以上が人生のルールである一方で、君主の偽誓や臣下の腐敗が近隣諸国を陥れる罠となりました。ルイ王はこういった偽りの姿に魅了されて、若い頃の放蕩から現在の老齡³⁾からくる盲信へと導かれました。そういう訳で、彼は自らの武勇、剛胆、剛勇を記すために彫像を建立させているのです。そして、心地よく贅沢な宮廷では、肚の太い軍事上の手柄が賞賛されているのです。

ロシアのピョートル大帝⁴⁾は、成年に達したときには、限りない権力を備えて夥しい数の人民と広大な領土を支配し、臣下の生命と人生の浮沈を一手に握る皇帝でしたが、自分自身と不幸な人々に想いを馳せました。この高潔な君主は、人々の間にあさましい無知と人生に対する無感覚な態度が蔓延している様子を知って我慢できませんでした。そこで、彼は勇気を奮い起こしてそれを改めることにしました。そのために、彼はお手本となる国に人を派遣するのではなく、栄光と名誉を獲得する真の方策と勤勉で純真で誠実な人民に職を与えることができる有益な技術を修得するために、彼自らが出向いたのです。彼がまず最初に注目したのは、手の技を必要とする仕事でした。彼はこのような輝かしい目的を抱いて、素性を隠して諸国を巡りました。彼は滞在した国で敬意を払われることはほとんどありませんでしたが、もっと大切なこと、つまり、治安の守り方とか戦争の技術などの様子をこまかく観察しました。このようにして、この偉大な君主は、偉大で永続的な名声の基礎を作りました。つまり、それは個人の努力、知識、勇気があって始めて可能なことだったのです。これまでの王を彼とともに名を連ねると傷つけることになるでしょう。学ぶために王座から降りて再び以前よりももっと洗練された姿で王座に就いた人は、彼以外

3) ルイ14世は1638年9月5日生まれなので、このとき73歳だった。1685年以降は第2妃マントノン夫人(1635-1719)が支配力を振るっていた。

4) ピョートル大帝は1672年生まれ。彼は1698年4月にイングランドを訪問し、デトフォードのジョン・イーヴリン(1620-1706)の邸宅セイズ・コートに滞在した。特に、造船技術に関心を寄せた。

には見当たりません。絶対的権力もその使い方を知って始めて意味あるものと考えたのも、彼を置いてほかにはいないのです。

この素敵な人物について考える場合、どこから賛辞を始めたらいいか当惑します。他の人の場合は、隠喩的つまり冷静な意味において、自制するといえるかも知れませんが、この皇帝は文字通り自分を自身の指揮下に置いているともいえるのです。彼が自らが召集した軍隊に兵卒として名を連ね、先頭に立ったことは、非常に度量のある立派な行為でした。⁵⁾この威厳に溢れた君主は、彼自らが先頭に立って戦うことによって、征服することを知り、被征服者の活用の仕方を知ったのです。彼は戦闘ではこのうえなく激しい気性を、そして勝利したときにはこのうえなく寛大な心を示したのです。この場合、フランス人の卑しい術策が洗練されており、ロシア人の誠実な努力が野蛮だと言えるでしょうか。そうです、野蛮とは真の名誉を知らず、名誉の代りに何か別のものを持ち出すことなのです。不実な君主は下劣で野蛮であって、立派な君主はひとえに名高く栄光に包まれているものなのです。

人々は間違った想像力によって自分たちに気に入ったことを押し付けるかも知れませんが、真実は常にその地位を確保するものです。栄光はほかならぬ美德の影ですから、⁶⁾美德がなくなると栄光も確実に消滅します。従って、私たちは真の栄光ということを心に留め、それに向かって邁進すべきです。先日、ホールにフランス国旗があるために眠ることも遊ぶこともできないと言ったウェストミンスター生徒は、永遠に不幸な目に会わないはずで。

ところで、私が本日の紙面の冒頭で引用した著者の意見に従って、真の栄光とは何かについて考えてみましょう。

キケロは、申し分のない栄光というものは、人々から愛されていること、人々から信頼されていること、人々から名誉を授けるに値すると考えられて賞賛の念が寄せられていることの3点が充足されて初めて可能だ、と語っています。⁷⁾これはローマでの偉大さについて語られたものですが、今日の我が国での申し分のない栄光とは何かを考える場合には、この名文句のほかに、この公爵がいて初めて人々の生活が成り立つということを付け加えなくてはなりません。公爵には富、権力、名誉、支配権、栄光が備わっているべきですが、こういったものに富が備わっているのではなく、公爵の気質に付随すべきものだ、と私は思います。⁸⁾公爵が寵児であることと評判がよいこととは相互に関係しているのです。このことが現実的な話でないとしましたら、彼にある外国の領土の統治権を与えてみれば分かります。彼はそれを自分の立場を考慮しない空虚な肩書と考

5) 1694年秋、ピョートルはモスクワでの軍事演習の先頭に立った(ユージーン・スカイラー『ピョートル大帝』ニューヨーク1884年)。

6) セネカ『書簡集』79.13. キケロ『トゥスкулムの論争』1.45.109. およびカウリー『随想』「影について」参照。

7) キケロ『フィリッピカ』1.12.29-30. 1.14.33.

8) モールバラ公は、この年12月31日アン女王によって罷免された(トレヴェリアン3.198-201)。

えることでしょう。⁹⁾ただ単に状況によって人が造られる場合があります。もしある人物が権力を握っても妬まれなければ、それは同時に誉れのあることであり、不興を買うこともありません。このように謙虚で威厳があれば、栄光は不滅のものになるに違いありません。

以上のようなことに思いを巡らせていますと、いつになく長広舌になりそうです。もしこの熱狂的な文章がほかの文章よりも長く生き残るとしましたら、この栄光に関する寸評を書いたのが、モールバラ公爵ジョンがああ記念すべき行軍をして、無血でフランス軍の前線を突破した1711年8月のことだったからでしょう。¹⁰⁾

第140号 1711年8月10日（金曜日）

【スティール】

彼は不安そうにあれこれ考えを巡らす。(ウェルギリウス)¹¹⁾

受け取った旨をお伝えしていない手紙がまだまだ沢山あるとお知らせしますと、当然のことながら、読者のみなさんは、私に大きな責任があると考えられることでしょう。と同時に、私が多少とも社会のために役立っていることをお認めいただけるものと信じています。そういう訳ですので、本日は、以下の通り、嘆願書を読むことに時間を割きたいと考えます。

前略

すでに時間を随分無駄にしましたので、この手紙が届きましたら、すぐにでもお返事をいただけるものと思っています。求婚者が私のことを真剣に愛しているかどうか教えていただきたいのです。彼の態度について出来るだけ詳しくお話しします。私と会うときには、彼はいつも節操の話をしています。でも、彼は2週間に1回しか訪ねて下さいません。聞くところによりますと、私が体調を崩しているときには、非常に案じているようですが、訪ねて来ることも使いのものをよこすこともありません。それは、彼が知人にため息交じりに語ったようですが、私に全面的に支配されていること、彼には私がいらない人生は不可能であることを私に分からせたくないからだそうです。彼が町を離れるときには、手紙は6週間に一度しかいただけません。私の手紙を催促し、会えない苦しみを訴え、燃える想いと苦悩と恋い焦がれているさまと高揚した気持などを伝えてきます。気短な恋する人にありがちな決まり文句を並べ立てますが、ペースはまるで気乗りしない恋をしている人物のようです。ご存知の通り、私が彼よりも速度を速める訳にはいきません。私は大時計の時を刻むような退屈な速度で歩まなくてはならないのです。実は、彼にはお金があ

9) モールバラ公は、ブレニムの戦い後、レオポルト皇帝からダニューブ南のミンデルハイム公国を受領することに同意していた(トレヴェリアン1.400)。

10) モールバラ公は、この進軍では一兵も失うことなく、ヴィラルルの防衛線を突破した。

11) ウェルギリウス『アイネーイス』4.285.

ります。母親は、おっとりしている分だけ確かだと言います。つまり、母親は、「愛は小出し」²⁾だと言うのです。でもどうでしょうか。彼が私のことを愛してくれていると思われませんか。どうか貴方のご意見をお聞かせ下さい。

草々

リディア・ノヴェルより

追伸

お金持ちというのは、とても厚かましくかつ冷たいものです。何卒、お金持ちにそのことを教えてあげて下さい。

拝啓

いつも貴紙を拝読させていただいていますが、先般の機知に関する実のあるお話はとても楽しく読ませていただきました。³⁾そういう訳ですので、現在陥っています間違った嗜好について、いつか機会を見つけてもっと詳細なご意見をいただければ有難いものと思います。私の見たところでは、この間違った嗜好が流布しているのはもっぱら二、三の人気ある著者のせいなのです。彼らはある点で他人の欠陥を是認するのです。従って、ミルトンを模倣する人たちは、かの偉人に伺える異様なつまり古風な言葉とか、大目に見ることは出来るものの、とても欠陥のあることを大変優れた文章と考えているようです。いわゆる句読点や言い回しを賞賛する人たちは、それをカウリーやオヴィディウスたちが名をなすことになった独特の適切な表現と考えます。そこで、こういった人たちは彼らのその点だけを模倣しようとしします。つまり、こういった人たちにとっては、何が公正であり、至当であり、もっともであるかといったことは、問題にはならないようです。これとは正反対の異様な結果が引き起こされることになります。要するに、どうしたらひとつの単語が二通りの意味にとってもらえるかとか、強引な隠喩がどんな結果をもたらすかといったことが、問題となるようなのです。さて、こういった著者は、きちんとしたつまり優美な身なりをしないで、自分を立派に見せようとする人たちに似ているように私には思えますが、これが問題なのは、私が欠陥と考えるこのような美点が、豊富な想像力とありあまった良識から生まれると考えられているからなのです。要するに、彼らは才気煥発であるといった特徴を備えているのです。どうか、彼らは全く機知とは無関係だということを世間に公表して下さいませんか。何卒よろしく願いいたします。

敬具

一愛読者 R.D. より

前略

2) この格言は16世紀からのもの。

3) 第58号から第63号参照。

私は若くて可愛いとされている女性です。という訳ですので、私が貴方にご無理をお願いをしましても許していただけるものと思います。実はお願いといいますのは、自分はラテン語が分かるからということで、いつも人のいうことに反対ばかりしているいとことの賭けに決着を付けていただきたいのです。「えくぼ (dimple)」という単語は果たして、p は、一つでしょうか、それとも二つ必要なのでしょうか。

草々

ベティー・ソーンター

追伸

どうか宛名は「心優しき質問者へ」として、リリー氏の店にお預け下さい。この件につきましては、知られたくありませんので。重ねてお願いします。

拝啓

昨夜、ハイパークを散歩中に、二人の友人に出会いました。その一人が、「ジャック、ワインを一杯飲みに行きませんか。飲まずにはいられない気分なのです。」と言いました。このとき、私はしばしば酒の席で起る様々な失敗のことを思い出しました。人はある気分から脱け出したいとき、酒の力に頼ろうとします。また、酒に誘うことで自分が相手をするのが嫌な人物を人に押しつけようとうとします。お願いですから、自分にとって厄介な相手は、他人にもそうなのだとすることを紙上ではっきり言明して下さい。友人に押しつけないで、楽しい気分が維持できるように、自分で考えて欲しいものです。どうかこのテーマについては精一杯雄弁になって下さい。そして、飲める者みんなが飲む心積りができている訳ではないのだということを力強く主張していただき、より快適な人生が送れるようにしていただきたいと思います。

敬具

前略

今朝、時間の過ごし方に関する記事を拝見しました。⁴⁾貴方は、女性、特にもう若くはなく色事も昔の話となった女性に心を砕き、非常に穏やかにゲームのことに触れておられます。余暇を少しばかりゲームに費やすことは間違ったことではないとお考えのようですが、是非とも女性の賭け事師の振舞いに関する貴方のご意見をお聞かせ願えませんか。

私は、ほかの点では礼儀正しく、気さくで、まさに育ちのよさを地で行くようなご婦人が、ひとたびオンバー⁵⁾のお呼びが掛り、ゲームが始まるや否や、どうしようもない気難しい人物に変わってしまうのを見かけたことがあります。

ご理解いただきたいのですが、沈着冷静な私は、ゲームに勝ちますが、お金を受け取るとき、

4) 第93号参照。

5) 第105号参照。

当惑します。このご婦人方があまりにも落着かなくなるからです。何卒お願いですから、こういったご婦人方にもっとしとやかな負け方を教えてあげてください。

草々

レイチェル・バスト⁶⁾

拝啓

紙上でレオノーラへの貴方の心遣いを拝見しまして、私も貴方にお手紙をお出しする気になりました。⁷⁾貴方はしきりに私たち女性を向上させることに関心を寄せていらっしゃると思いますので、私の不躰なこのお手紙をお出ししても許していただけるものと考えています。私は私の心を貴方のおっしゃる適切な美点で飾りたいと心から願っています。貴方はそれには読書がいいと主張なさっておられますが、美点を手に入れる資格が私にあるかどうか判然とするまで、私は非常に不安です。どうか、著者を何名か推薦して下さいませんか。

実を言いますと、最初レオノーラの手紙を読みましとき、私が貴方をお願いする機会はなかったのかと思いました。とても大切なことなのですが、その日の『スペクテイター』紙を拝見しましたとき、私は非常にがっかりしました。そして、現在も時間をどのように使ったらよいのか途方に暮れています。レオノーラへの前口上のように、私のために舞台をひとつ作ってもらえないでしょうか。私だけでなく知人の気持ちもお伝えます。私たちは一様に平凡に時間を過ごすことに満足していません。自分たちには知識を求める熱意があり、現在自分たちが無知であるとの認識が、真剣に向上したいという気持ちの前兆と考えられますなら、このお願いに応えていただくために貴方がお使いになれるお時間は無駄に費やされるものではないと思われます。蛇足ながら、貴方にレオノーラへの特別の関心がないとしましたら、私の方こそ貴方のご好意を受ける資格があると思います。なぜなら、私は貴紙をお茶の席で読むのには満足してなく、しばしば私室で独りになって読むのを楽しみにしているのですから。私が向上する能力があり、お世辞が嫌いな人物であることをお分かりいただきますために、貴紙のすべてが気に入っている訳ではないことをお知らせしておきます。とはいえ、そんな場合でも、疑いを差し挟みますのは、観察者殿の造詣の深い見解よりも私自身の浅薄な理解力に対してなのですが。

敬具

パーシーニア⁸⁾

この最後の手紙には、非常に切迫した真剣な様子が伺えますので、彼女の要望にお応えするのが私の義務だと思われます。早急にそうしたいと考えています。⁹⁾

6) オンバーおよびカドリルといったカードゲームで使用するクラブのエースの名前。

7) 第92号参照。

8) ニコルスによると、パーシーニアとレオノーラは姉妹。

第141号 1711年8月11日(土曜日)

【スティール】

すべての喜びは、最初は耳から入り、
つぎに空虚な目の楽しみへと移っていく。(ホラティウス)¹⁾

現在、貴顕の諸氏が田舎へ出掛けて、町は寂しくなっていますが、下積みの役者諸氏から演技の苦勞を認めて欲しいとの願い出を何通か受け取っています。ころんだり、つまづいたり、背中を叩かれたりしているのは、冗談と思って欲しいとのとても丁寧な要請を私宛てに送ってきています。しばらくの間、こういった飛んだり跳ねたりの演技に目をつぶろうと思います。なぜなら、この悪ふざけは、身分が高く審美眼のある人たちが町に帰ってくる頃までには姿を消しているものと思われまので。しばらく前には、こういった飛んだり跳ねたりするやり方は、視覚能力しかない観客を綱渡り芸人や宙返り芸人²⁾で楽しませるためのものだったのです。これはこれでとても思慮深い方法でした。というのは、これによって、混乱がなくなり、身体に可能なありとあらゆる姿勢を取る役者と心に宿るあるとあらゆる熱情を表現できる役者の区別が可能になったからです。ところで、たとえ慎重に取り扱うとしましても、肉体派の役者と頭脳派の役者は、同一の舞台に載せないで、互いをもっと遠ざけるべきです。このためには、ベアガーデンの改善策を提案しなくてはなりません。肉体派の役者は全員そこへ放逐してしまうのです。

人々が集う芝居よりも重要な事柄の場合は、ことの重要性が人々を支えます。たとえ、申し立てをする人とか説教をする人がしゃがれ声でごちなくとも、ことが重要であれば、敬われ、注目されます。だが、芝居の台詞の場合には、役者がきちんとしており、奥ゆかしくなければ、完全なお笑い草となってしまいます。耳と目の楽しみ以外に何も期待されていない場合には、その楽しみをほんの少しでも奪ってしまうことは、このうえない不満のもととなります。芝居では、役柄をкаろうじてこなすのは感心すべきことではありませんが、ほんの少しでも途方に暮れることは軽蔑されて当然なのです。この厄介で微妙な事態の実現を阻止しようとする知らせが私の元に届けられました。私が町を留守にしている間に、役者たちが空を飛び、火災保険事務所³⁾の使用人とかタイル職人とか石工以外には誰も出来ないような悪ふざけをしたり、運を天にまかすよう

9) ニコルスやその他の編者によると、スティールは1714年に『婦人の蔵書』を出版してこの約束を果たしたということである。

1) ホラティウス『書簡詩』2.1.187-8.

2) パーソロミューの市や五月祭で人気のあっただしもの。

3) ハットンXによると、1708年当時には、フリート・ストリートのレインボウ・コーヒーハウスのフェニックスとテンプルバー外のパルスグレイブ・コートフレンドリー・ソサイアティとセント・マーティンズレーンのアミカブルの三事務所が営業していたということである。1711年8月のこの時点で最も有名だったのは、おそらく王立取引所の裏のアムステルダム・コーヒーハウス近くにあったサンファイアーであった。

な危険な立ち回りをしたとの知らせでした。つぎの手紙の主は、どうやらこの手の芝居を観て、私にほやいているようです。この方はこの作家が備えているとても優れたユーモアの才能をあまり考慮しないで、不快に感じた箇所だけを痛烈に非難しているのではないかと私は思います。この方が愉快的な人生観を描いていれば、それほど執拗に攻撃しないで、退屈な魔女は追放した方がよい、といった優しい言い方になっていたはずです。

拝啓

モル・ホワイト⁴⁾が貴方に同行して町にやって来て、『ランカシャーの魔女』⁵⁾に出ていると聞きましたので、先週その芝居を観に行きました。幸いにも、私の隣に座っていたのは(その人が言うには)サー・ロジャーの隣人の治安判事でした。魔女たちが踊っているときに、モル・ホワイトはあれですよ、とその治安判事が教えてくれました。この芝居には、判事さんの言うことを信じたくなるほど、呪術がふんだんに散りばめられていました。ベン・ジョンソンは片端同然で、ブロック・ジュニアはかろうじて絞首刑を免れました。観客は驚きの連続でした。2ヤードほど離れた1階席にいた旧知の仲の資産家に会釈したのですが、彼は私の存在に気づかないほどでした。

もし貴方が田舎の人たちが言う「白い魔女」⁶⁾を矯正できる魔術師だとすれば、貴方には是非ともその場に同席していただき、例の箒の柄の魔法を追い払ってもらえばよかったと思っています。私たちは3時間以上に渡って魔法に取りつかれたのです。私なら、狩りをする人たちを脅かし、判事を苦しめ、聖水を手にした律義なアイルランド人を利用してきた魔女たちに十字架を背負わせることができたでしょう。喜劇で魔女を用いる場合は、魔女は中途半端な描き方にした方がよかったのです。陽気で楽しいことと黒い小羊の犠牲や魔女の悪魔崇拝の儀式との関係は、私には理解できません。

この芝居を書いた紳士は、登場人物の何名かは実に上手く描写しているのですが、どうやら軽率にも無類のシェイクスピアの魔力に惑わされたようです。『マクベス』⁷⁾に登場する呪文は、この悲劇に見事に適合した厳粛なものであって、相応の恐怖心を喚起させます。おまけに、魔女は筋立てそのものの一部となっています。その詳細は、シェイクスピアが借用したと考えられるヘクター・ボウイーシャス⁸⁾を読めば分かります。従って、魔女は暗くて忌まわしく血生臭い事柄の場

4) 第117号参照。

5) シャドウエル (? 1642-92) の1681年の喜劇。1710年3月11日、20日、4月14日、1711年8月3日、7日にドゥルレー・レイン劇場で上演された。役者は、ミルズ、ブース、ジョンソン、ブロック・シニア、ノリス、パック、ブロック・ジュニア、エルリントン、パウエル夫人、ブラッドショー夫人、コックス夫人など。魔女役は、バークヘッド、ライアン、ウィリス。

6) 第131号参照。

7) 第45号参照。

8) ヘクター・ボウイーシャスはラテン語でスコットランド史を著わした。これがジョン・ベレンデン

合は相応しい登場人物となりますが、喜劇の場合は全く相容れないのです。この手のものは、それ自体不愉快なものです。シェイクスピアのような想像力の手を借りない限り、人々を楽しませるものにはなり得ません。そのため、ドライデン氏はボーモントとフレッチャー⁹⁾にさえもシェイクスピアの模倣を認めませんでした。「シェイクスピアの魔術は真似ることはできない／シェイクスピア以外の誰もそこに足を踏み入れる勇氣はない。」¹⁰⁾

しかしながら、この喜劇で、追い払って欲しいものが魔女だけでしたら、私はわざわざ貴方にこんなことをお伝えしなかったと思います。私が言いたいのは、何箇所か野放図な点があるということなのです。戯れはまともな感覚の持ち主にはうんざりすることであり、慎み深い人にとっては憤りを覚えさせますが、この戯れが騒々しい馬鹿騒ぎを生むということに気づかなかつたら、この点は見落としていたと思います。

こういった野放図な振舞いは、時代の好みのせいに違いありませんが、実際には、詩人はこういった描写をすることで、最良の観客を犠牲にします。つまり、ボックス席の観客を無視して、果物売りの娘たちを相手に書いていると思われることでしょう。

最後に、この喜劇の教訓について触れない訳にはいきません。二人の若い婦人が自分たちを思い通りにする権利があると考えている人たちを出し抜き、親の同意を得ないで結婚する格好のお手本を示します。感情を害したうちの一人は、簡単に気を取り直しますが、「私たちがどう考えようと／運命によって、私たちの意向はくつがえされます」¹¹⁾と言ってその場を締めくくります。

洒落者は賞賛に値すると考えることはできますが、放蕩者であれば、申し開きもまた十分成り立ちます。ハンス・カーヴェルの妻はこの手の考えの持ち主です。彼女は申し開きをする場合でも深刻にはなりません。どちらかというとおどけた調子でうしろめたさをはぐらかす微妙な言い方をします。彼女は「もしか弱き女性が道に迷った場合は／罪深いのは、女性というよりも星回りなのです」¹²⁾と言うのです。おそらく、これで十分な償いとなり、観客はとてども啓発されて劇場を後にすることでしょう。

以上のことは、すでに貴方が部分的に追求なさっておられることです。そこで、芝居のような高尚な娯楽を統制するために、是非貴方のご意見をお聞かせいただきたいと思います。今後は芝居を書く人たち全員が、最も優れた分別の持ち主を喜ばせるのだという大望を抱いて、自分たちの才能を花開かせ、理性や礼儀作法とは無関係のベアガーデンとかその他特許状のある娯楽場の馬鹿騒ぎ以外には人間らしさのかげりも見せない連中のことは無視して欲しいものと思います。

によって翻訳され、ホリンシェッドが『年代記』を著わす際に、その翻訳版を利用した。そして、シェイクスピアはこの年代記を参考にしたのである。

9) ストランドのキャサリン・ストリート向かいにあるシェイクスピア・ヘッドにおいて、トンソンによる8巻本の全集が出版された。

10) ドライデン『嵐』序幕19-20。

11) 5幕最後の行。

12) マシュー・ブライアー (1664-1721) の詩。

敬具

1771年8月8日¹³⁾

第142号 1711年8月13日(月曜日)

【スティール】

絆は断ちがたい。(ホラティウス)¹⁾

つぎの手紙は本物²⁾であり、殊勝な熱情を反映したものですので、この老婦人の忠告を喜んで受け止め、彼女の幸福をお伝えすることで私の執筆に代えたいと考えます。

1711年8月9日

拝啓

私は現在67歳です。貴方のご意見に賛同しながら貴紙を拝見していますが、私の見たところでは、どうやら貴方は人生における最も重大な悪の根源を攻撃なさっておられないようです。その根源とは、色事に対する間違った考えのことです。これは、これまでもそうでしたが、現在でも、非常に具合の悪いことなのです。結婚して40年経過しましたが、終始幸せになるようにしつけられた私には、その愚行がよく分かります。要するに、私の若い頃は、時代の悪弊を避ける人たちは誰でも、とても慎重な教育を施され、根も葉もないことはすべて目が届かないところに追いやられたものです。崇高で尊い単純明快な聖書物語が描かれたタペストリーの方が、現在のヴィーナスとアドーニスとかバックスとアリアドネーの恋が描かれた壁紙³⁾よりも、はるかに趣きがありました。私が結婚した紳士は、有頂天になって私に言い寄りましたが、それは夢見る勇者とか哀れっぽい伊達男ではなく、クリスチャンが抱く、そうなのです、紳士が抱く忘我の状態でした。これが私たちの生活の基盤となりました。二人が互いをどのように考えていたかお分かりいただくために、彼の手紙を同封します。一通は40年前、私たちが結婚する前に書かれたもので、もう一通は長年一緒に暮らしてきた先日書かれたものです。

敬具

アンドロマケー

1671年8月7日⁴⁾

13) この手紙はジョン・ヒューズのもの。

1) ホラティウス『頌詩』1.13.18.

2) スティールがメアリ・スカーロックと再婚する4年前に、彼女に宛てて書いた手紙。原物は英大博物館に残っている。

3) 部屋は腰板となっており、旧式のタペストリーではなく、聖書の物語が描かれた壁紙が張られていた。

拝啓

貴女の幸福と安らぎをお祈りする私の心からの気持ちに何らかの効力があるとしたら、貴女は昨夜必ずや守護天使に見守られながら安眠なされたことと思います。私は貴女のことを片時も忘れず、貴女に人生につきものの事故が降りかかりはしないかと危惧し、絶えず祈りを捧げています。貴女が、私が言い寄っていることに苦痛を覚え、傷つきやすく悲哀に満ちた私の気持ちを無礼だと考えておられるのではないかと、あれこれ思案し、苦しんでいます。貴女を前にすると、私の眼差しは、またたくまに愛情でこぼれんばかりになりますが、ほとぼしる情熱に安らぎは訪れません。私の発言内容を指図し、しきりに心の疼きをすべて貴女に打ち明けなさいと迫ってきます。嗚呼、我が魂よ、お前はどこへ行ったのだ。お前の心遣いはすべて断たれてしまったのか。私が著わす書物は無味乾燥で、友人も邪魔です。貴女に憐れみの気持ちを投げ掛けてもらわない限り、私の心は安らぐことはありません。そうしていただくことで、貴女の喜びはより確固としたものになります。苦しみを与えることは暴虐で、幸せを生み出すことは真の美の帝国を築くことにほかなりません。正当にお考えいただければ、心地よい変化が生まれます。奴隷を放逐して、懇懇な伴侶を獲得することになります。私は後者を期待しながら前者の状態であることに耐えています。私は捕虜の身ですが、権力者のことをばやくことなく獄舎につながれた生活を甘受しています。そして、慈悲が提供してくれる特権を享受しているのです。

敬具

「私は彼の好意に対して何も言質を与えていませんが、つぎの翌月に書かれた手紙を見ますと、彼が見込みがあると思っているのが分かります。」⁴⁾

1671年9月3日⁶⁾

拝啓

私は今朝空が白む前から目覚め、夜が明けるのを心待ちにしました。それは私に何か新しい喜びを与えてくれるからではなく、ひとえに、貴女を祝福してくれるからなのです。貴女は、私の願い通りに、一夜心安からに過ごして、再び、潑刺とした一日を迎えるに違いありません。もし私の祈りが聞き届けられますと、貴女の一日は慈悲深い神のご威光に包まれるはずで、素敵な貴女に言うておきますが、ほかの人々には彼らが心を寄せる無知な人のことを語らせておけばいいのです。私はそういった低劣な愛は軽蔑します。貴女とのことでは、すべてをお見通しの神が私に祝福を与えて下さるよう懇願しています。どうか貴女に神のお導きがありますように。そして、貴女の純真さ、貴女の高潔な振舞い、貴女の賢明な若さにいつまでも神の恩寵とご加護がありますように。ご婦人方には聞きなれない言葉でしょうが、貴女は高尚な心の持ち主です。つま

4) これは1707年8月22日のスティールの手紙。

5) この箇所は、明らかにスティールが付け足したもの。

6) これは1707年8月16日のスティールの手紙。

り、貴女は、軽薄にも甘言に誘われ、偽りの浅薄な敬慕に惑わされ、先々軽蔑してしまうようなことになるお方ではないのです。ああ麗しきお方よ、貴女は美に包まれています、私は貴女の心も愛しているのです。私にとっては、貴女の魂は自分の魂と同じくらい貴重なのです。教養、知識、世俗の軽蔑心といったものが、徳高く敬虔な生活を厳格に守ろうとする努力と結びついて、貴女同様私にも新たな理想を育くむことになれば、私たち二人の日々は、喜びに包まれて過ぎて行くことでしょう。そして、加齢は、衰えを意識して憂鬱になることもなく、より快適な生活を求める永遠の若さを与えてくれることになります。仕事に追われて手紙を書く時間はわずかしがなく、書いた内容を読み返す時間ありません。そこで、十分に意を尽してなく、まとまりの悪いものになっているのではないかと思います。何卒、その点をご容赦ください。

敬具

「つぎの二通は、結婚が決まった後で書かれたものです。」

1671年9月25日⁷⁾

拝啓

恋をし、しかも仕事をするのは、とても骨が折れます。私の場合はどうかと言いますと、仕事はいつもそっちのけです。私を閉じ込めるしか方法はありません。そうでもしなければ、他の人が代りをします。今朝、ある紳士から、オランダからどんなニュースが入っているかと尋ねられ、私は彼女は実に美しいのだと答えたのです。また別の人からは、この前いつウィンザーに出掛けましたかと尋ねられ、私は彼女が私と同行する予定だと答えたのです。私の心が少しでも落ち着きますように、結婚式までにせめて貴女の手キスをさせて下さい。思いますに、貴女に手紙はいくらでも書けますが、いくら言葉を尽しても、思いの丈をお伝えすることは出来ません。どうしても冷ややかなものになってしまいます。

敬具

1671年9月30日午前7時⁸⁾

拝啓

結婚できますのは、神のご威光もさることながら、まさしく貴女のお陰です。深く感謝します。このように素敵なお話をしながら夕べを過ごし、貴女のような素晴らしい女性を尊敬できることは、言葉では言い尽くせない幸せです。我が愛しきひとよ、私は恩義を感じる側にいられることに満足しています。そして、日々、貴女および私の知り合いの分別のあるすべての人々に、貴女の選択が謙遜であったことを確信していただけるよう努力します。

7) これは1707年9月1日のスティールの手紙。

8) これは1707年9月3日のスティールの手紙。

敬具

「つぎの手紙を書いたとき、彼は我が国の誰よりも愛想よく、快適な気分でした。」

1671年10月20日⁹⁾

拝啓

紙がお粗末で誠に申し訳ありませんが、仕事のことがあり、コーヒーハウスで書かざるを得ないのです。私の周りには、せわしなくお金のことを喋っている不愉快な連中が大勢いますが、私の大望、私の財産はひとえに愛なのです。愛によって、私の心は鼓舞され、私の気持ちは快適になり、私の魂は広くなり、私の生活そのものが感動的になります。私の言動に絶えず高潔な考えがいろいろ添えられるのも、素晴らしい貴女のお陰です。崇拜者に崇拜される人と同じことが生まれるのは、この高潔な情熱がもたらす当然の結果なのです。このようにして、私は、非常に素敵な相手がいるお陰で、日々向上することができます。我が愛しきひとよ、貴女を造っていただいた神を敬い、私と共に、私たちの愛情に溢れた清らかな日々に、神のご威光が降り注ぐようにお願いしようではありませんか。そして、私たちを結んでくれた神が私たちを祝福し、無常の境遇に幸福を与えて下さるようお願いしましょう。すべて神のご意志に従うのです。私たちは常に神を、そしてお互いを大切にしなければなりません。

敬具

「今回はこれで最後にしますが、つぎのしおれた筆跡をご覧いただければ、40年経っても、相変わらず贈物を喜んで受け取るように手紙のことを口にする心優しい人物がいることを知って微笑ましく思われるに違いありません。」

1711年6月20日¹⁰⁾

拝啓

昨日手紙を書きませんでしたことを心から申し訳なく思っています。貴女のことを忘れたからではなく、先般のテーマについて私の考えがまとまらなかったためなのです。そこで、考えがはっきりまとまるまで見合わせたのです。我が愛しきひとよ、人生につきものの加齢とか不幸とかその他何らかの不慮の災難に出会っても、貴女が結婚を承諾してくれたときの貴女への心地よい敬いの気持ちとか輝かしい思い出は失っていないのです。

敬具

9) これは1707年8月30日のスティールの手紙。

10) この号のために書かれたと思われるこの手紙も、ニコルスはスティールが妻に宛てて書いた本物だと考えている。

第143号 1711年8月14日(火曜日)

【スティール】

人生は健康に恵まれて初めて人生といえる。(マルティアリス)¹⁾

知人に期待するのは理不尽なことです。いつも体調がすぐれないとか気分が悪いと泣き言をならべる人がいます。²⁾ こういった人たちはどうしていいか分からず、家に引きこもらずにみんなのところへ出てくるのです。病気の場合は、医師ででもなければ手の施しようはありません。ほかの人たちが楽しくしているところで嘆くときは、召使に命じてコードゥルかミルク酒³⁾を一杯持ってこさせても、それを悪く解釈してはなりません。それは帰宅して寝た方がよいという忠告にはかならないからです。私たちが通常理解している社交というものはなごやかな雰囲気を楽しむことなのです。つまり、社交はみんなを楽しく陽気にさせる場であって、他人を悩ますような話題を持ち込むべきではないのです。自身の心配事、悩み事、病気、不安感、嫌悪感といったことは、どんなことがあっても、友人に披瀝してはなりません。いわゆる人生の浮沈というものはそのほとんどが不満の種となることを考えれば、友人に関係のない難儀なことは持ち出さないで、もっと友人に心配りをすべきです。人生は元気であってはいじめて人生といえます。従って、虚弱体質の人が仲間に加わるときには、その人に会がお開きになるまでは一言も発しないと誓わせるべきです。会を楽しくするために、いつも頭に花の冠、バラの冠を載せて集まるべきだと言っているわけではありません。(よくあることなのですが) いつも自分はみじめだとぼやく人が同席すると、その会は九分九厘面白くないものになってしまうと言いたいのです。私たちは、何をするときでも、爽快な気分を維持すべきであって、満足感を覚えなくなるまで落ち込んではいけません。これを可能にする方法は、身体を動かし、心を安らかに保つことです。この無味乾燥な状態は、気力もまたなくなりますが、人生の一部に持ち込んではいけません。何か無垢な喜びに満足したり、満ち足りた気持ちで何か賞賛に足ることを追求しているときには、人間らしい生活を獲得しているのです。わざわざ憂鬱になったり不機嫌になったりして、不幸な側面を増大させなくても、運命の女神は私たちに失望や病を過不足なく与えるものです。真の不幸に見舞われる人は大勢いますが、その一人である気の毒なコティラス⁴⁾は、慢性病の持ち主でお金にも恵まれていませんが、不満をこぼしたことはありません。誰にでもあることかも知れませんが、誇り、虚栄、気取りを克服し、ありのままに暮らすといった彼のような気質は、他人と競うところがありませんので、くじけることはありません。かりに立身出世への道でなくても、自然が命ずること以外は何

1) マルティアリス『警句集』6.70.15.

2) この号の冒頭の段落は、スティールがすでに100号で述べていること。

3) コードゥルは、かゆにタマゴ、砂糖、香料、ワインあるいはビールを入れた温かい滋養飲料。

4) コティラスは、おそらく「ベッド」と呼ばれる小さな家に住んでいたマーティン氏のことで、後に登場するユーラニウスは、おそらくジョン・ヒューズ氏のことと考えられるが、確かな証拠はない。

も気かけないことが、結局は目標に到達することになります。この気質であれば、身体は健康は維持され、心の安定も保たれます。コティラスは世間に軽蔑の眼差しを向けますが、それはしらふの人が酔っ払いを見る目と似ています。現状に満足していれば失望することはない、と彼は言います。恋人のことで、彼が愛さなかったのが間違っているということで、もし誰か別の人が彼女のことを高く評価していたら、彼は彼女のことを諦めていたでしょう。もし彼女の美德が彼の熱情に一役買っていたとしたら、彼女の軽率さは彼の救いになっていたでしょう。つまり、彼女が不実であり同時に立派であるなんてことは考えられなかったのです。

私たちはいつも健康であるとは請け負えませんので、健康が衰えた場合に備えて、最高の支えとなれる気質を身につけておくように努力すべきです。ユーラニウスは沈着冷静な心の持ち主で、大多数の人々が魅了されることには無頓着です。彼は激痛にしか心は乱されません。この激痛でさえ、彼は親友にはすぐにおさまる秘訣があるのだと言います。ユーラニウスは完全に別の人生を確信しており、そこに関心を見出そうと誠心誠意努力していますので、痛みはその場よりも備えのある家に足を急がせる単なる手段に過ぎないと考えます。彼は、ほかの人々が陥りやすい憂鬱な考えを抱かずに、自分は必滅であることを忘れてたと言います。また、自分に死が訪れるとは思わないと言います。生まれたときに永遠の存在の一部となったのだと彼は考えます。そして、死の瞬間の持続時間は通常の睡眠の半分にも及ばないので、それが人生の妨害をすることを許さないのです。このように、彼は将来のことは懸念も期待もしないで、終始機嫌よく、適度な心配りをしながら人生を送っています。彼にとって、健康は他の人の喜びにまさるものであって、他の人々ほど病に襲われることもありません。

正直言って、人生をこんな風にでも見なかったら、我慢強く人生を送れる者は白痴しかいません。細かい心遣いをする洗練された婦人のことを考えてみて下さい。そうすれば、またたく間に彼女が周囲の出来事にうんざりしているのが分かります。私はあまりにも繊細すぎて活力が湧いてこない婦人を一人ならず知っています。彼女たちは接触する見ず知らずのぞっとするような人物にへき易します。ある人は気詰まりで、またある人は無愛想なために、彼らと同席するのは苦行と思えるのです。ご承知の通り、ご婦人方の間では、礼儀作法とかしつけといったことが、心がやすまらない原因となっているのです。私は請け合いますが、もし召使が、死者の記録を作成する教区教会の書記のように、主人の体調を週単位で書き留めるとしたら、紛れもなく体調が悪いのは30回のうち1回くらいのもので、それ以外は大丈夫なのです。

常に健康的な生活を送るためには、できれば心の平静さを保つことが最大の喜びと思えるように心掛けるべきです。好運に恵まれたとき狂喜するのは、不幸に見舞われたとき落胆するのと同様、あさましいことなのです。状況によって、笑ったり泣いたりするようでは軟弱です。いかなる場合でも感情を高ぶらせてはなりません。苦しみから脱け出すことを楽しみとする方策を身につけるべきです。あらゆる喜びにまさる沈着冷静な心を自分のものにし、どんなことでも気分良く迎えられるければ、野心や妬みや取り止めのない欲望やお門違いの陽気な気分に取りつかれる

ことになります。私が思いますに、人生を楽しむ賢明な方法は、ほかのことは卑下してしまうことなのです。現代のある偉大な著者は、この点をうまく書き留めました。この著者は、彼の著『現世論』の中で、人生に対する達観した見方を示しながら、つぎのように語りました。

「現世は取るに足らないつまらない行為の循環に過ぎない。横になっては、また、起き上がる。衣服を身につけては、また、脱ぐ。食事をし、また、ひもじくなる。働いては遊び、疲れる。そして、また、横になる。この繰り返した。一日はつまらないことで過ぎ、夜になると、愚かなベッドに身を投げ出す。そして、夢を見、思考は途切れ途切れとなり、突飛な空想に駆られる。理性はかたわらで惰眠をむさぼり、私たちはその間、小屋や野原で眠っている獣と何ら変わらない状態となる。人間の能力は獣よりも高等ではないのか。人間の大望や期待はもっと崇高であるべきではないのか。別の世界に飛び込んで行こうではないか。そうすれば、少なくとも公明正大で崇高になれる可能性がある。現世には、私たちが思いを巡らせたり、情熱をふりそそぐに足ることは何もない。かりに失望したとしても、ほかの人たちよりひどい状態になる訳でもない。かりに期待通りにうまく事が運べば、永遠の幸せをつかむことになる。」⁵⁾

第144号 1711年8月15日(水曜日)

【スティール】

ご存知の通り、私は美の批評家なのです。(テレンティウス)¹⁾

美は当初から喜びと同時に苦しみ種でした。哲学者たちはその影響力を鋭敏に察知しました。そこで、哲学者たちはほぼ一人残らず、自分は美の力を十二分に理解していることをほのめかす何らかの格言のようなものを残しました。ある哲学者は、人に好ましく思われようとすれば、最高の手紙よりも、優美な容姿の方が効果的だと語っています。またある哲学者は、美の所有者に、美は自身の手柄ではなく、単なる自然の贈物に過ぎないのだと考えて欲しいと言っています。三人目の哲学者は、美は短命の暴君であると言います。四人目の哲学者は、美は言葉の助けを必要としないので、沈黙のペテン師だと言います。そして、カルネアデスですが、彼が美は武力を持たない王者だと言ったとき、まるで恋をする人のような口振りですが、他の哲学者と同じ心意気だったのだと私は思います。²⁾ 事実、美には何か抵抗できない点があることは否定できません。どんなに厳格な人でも、目鼻の整った人物に即座に悪い印象を持ったとは言わないでしょう。たいていの場合、容姿端麗な人物がまず最初に注目されるという特典を備えていることを誰も否定しません。とはいえ、容姿端麗な人物は、美をいわば自分たちのあずかり知らない財産と考えるべ

5) トマス・バーネット『現世論』第3巻76-77頁(1697年第3版)。

1) テレンティウス『宦官』566。

2) ここで述べられているのは、前から順にアリストテレス、プラトン、ソクラテス、テオフラストス、カルネアデスのこと(ディオゲネス・ラエルティオス『著名な哲学者の生涯と学説』第5巻18-19)。

きです。美は誰にも付与できるものではありませんし、たとえ持っていたとしても保存できるものでもありません。人々は美にまさる素養を身につけることができます。生まれつき美の影響を受ける人たちにとって慰めとなるのは、思慮分別があつてほんの少し注意さえすれば、その影響を受けなくて済むことです。たいていの場合、容姿端麗な人物は異様なほど自己満足しますので、警句で言われているように、一目で射止められないと、二度目に会ったときには無力な存在となつてしまいます。ところで、本日の紙面では、美に屈したときのかわし方を提案するというよりもむしろ、危険の所在をお知らせするある種の警告といったものを掲載することにします。

アマリリスは町に来て一冬しか過ごしていませんが、本来の姿を見失うことなく、実に見事に行儀作法を身につけました。彼女は生まれながらにして備わっている純真な容貌を台無しにしないで、通例町の婦人の喜びでもあり誉れでもあるじろじろ見つめられることに耐えます。人々の集まる場所では、彼女は自分がその場で最も華やかな人物であるとは気がつかずに、気楽に周囲の人たちに視線を送ります。

グルシッサもアマリリスに負けず劣らずの人物で、作つたというより生まれながらにしての美人といえます。扇や手足の動きを止めたとしても、彼女はもくろみ通りに威力を発揮するでしょう。自分から餌食となろうとしても、そのようには受け取られません。どんな画家でも、短時間では彼女のさまざまな姿を描ききることはできません。彼女は陽気で気楽に振舞うためにほとんど苦勞することはありません。

メラブは女性の魅力と男性の社交上の才を兼ね備えています。彼女があれほどの美人でなかったとしても、彼女は間違いなく機知に溢れています。彼女があれほど機知に富んでいなかったとしたら、彼女にはもっと美が備わっていることでしょう。彼女には気取りがあるために、長所が歩調を合せません。彼女は何かに口にしようとすると、それなりの素振りをしなくてはなりません。自分が気楽にしていると思われない場合には、同時に何か気のきいたことを言わなくてはなりません。そのため、賞賛されたいという下心そのものが台無しになってしまいます。このように、不幸なメラブは、機知に富んでいて美人でもあります。いつもその双方であろうとしますため、あふはち取らずになってしまうのです。

アルバシンダは人に気に入られる能力だけでなく、わざも備えています。姿態は堂々としていますが、容貌は控え目です。善良な男性は破壊者に用心しなくてはなりません。彼女は確実に自分のものとするまでは、まるで妹のような口振りで話し掛けてきます。だが、いったん自分のものとなると、非常に厄介な暴君となります。彼女のなれなれしい振舞いに接し、可もなく不可もない質問を受け、一般的な話をしていると、彼女に心酔する者たちの中で、賢明な人は逃げ出しますが、愚かな人はすっかり期待してしまいます。彼女は自分が美人であり、機知に富んでいることを意識し過ぎていますので、誰に対しても無関心にはなれません。そこで、彼女は、なれなれしくすることで自分の価値は落ちることはなく、うわべは自分が完璧であるとは思っていないふりをするので、賞賛を勝ち取れるのだということを知っています。

ユードーシアは背がすらりとしていますが、それに加えて、彼女には女性の中でひとときわ際立つ精神の高潔さといったものが備わっています。美には、それぞれ愛らしいもの、感じのよいもの、魅力的なものがありますが、ユードーシアの場合は、威圧的です。つまり、ユードーシアへの愛は、栄誉への愛に似た感情が伴います。他の女性を愛する者の場合は、その気持は次第に和らいで慈しみへと発展しますが、ユードーシアを崇拜する者の場合は、それが次第に功名心へと高められます。

ユークレイシアは思いやりに溢れた心の持ち主です。彼女は女性ですので、もっぱら女性的なところが賛美されます。男性の威厳ということになると、男らしきの資格として不可欠な知恵と勇気というものを考慮しなくてはなりません。同様に、申し分のない女性ということになると、優しさと敏感に恐れを感じ取る心などがあがります。これが男性との違いとなる訳です。男性に幾分従属することになりますが、そうすることで、女性は一層素敵になります。ユークレイシアはどこから見てもそういった女らしい女と言えます。手管として優しさが、武器として美があります。顔つき、声、身振り、振舞いのすべてがまさしく女性的なのです。彼女のすべての振舞いには、特色として、恐れと優しさが混ざります。そこで彼女の感情を害することは野蛮であり、彼女を獲得するために手練手管を駆使することは残酷な行為となります。美人は大勢いますが、ユークレイシアは美人の中の美人なのです。

オムナマンテは人をだますために生まれてきたような女性です。彼女は貞婦として名高いルクレティアのような無垢な容貌をしています。心はルクレティアよりももっと名高いクレオパトラのように激しいのです。彼女の顔はウェスタに仕えた処女のようにですが、心はメッサリナ³⁾なのです。彼女の無頓着な素振りを見た人は誰も、その素振りの下に、才気縦横な娼婦とか強欲な娼婦とか淫蕩な娼婦が潜んでいるとは気づかないでしょう。彼女は、いつでも、しかられた子供のように涙を浮かべることができます。相手が嫉妬で怒り狂い、不実をなじると、可愛い顔にうろたえた表情を浮かべることができます。彼女は涙をぬぐい、うちふるえ、脅えた表情を浮かべますので、相手は自分の怒りがいかにも人でなしの行為であり、自分が悪者に思えてきて、許しを請い、新たに贈物をするようになってしまうのです。

ところで、私は女性を相手にする人だけでなく、女性のためをおもって、美人に接するさいの危険性について述べてきましたが、最後に、実にうまく言っていると思われませんが、古代の賢人とある美しい若者とのやりとりに触れておきたいと思います。この賢人は、その若者が真鍮に身を包んだ自らの姿にほれほれしているのに気づいたのです。「あなたの姿をどう思いますか。」と哲学者は尋ねました。「とても見事だと思います。」と若者は答えました。「あなたはたかが真鍮の

3) メッサリナは不品行で有名なクラウディウス帝の第3妃。これに対して、ルクレティアは貞節の鑑とされた。

4) アテナイの哲学者アンティステネス(444?–?371B.C.)のこと(ディオゲネス・ラエルティオス『著名な哲学者の生涯と学説』第6巻9)。

ことを誇りにしている自分を恥ずかしいと思いませんか。」とこの犬儒学者⁴⁾は応じたのです。

第145号 1711年8月16日(木曜日)

【スティール】

私の富が私の愚行を後押しする。(ホラティウス)¹⁾

つぎに掲げます無法が一度言っただけで改まらないとしましたら、寄稿者のみなさんには今後
も引き続き注目していただきたいものと考えます。

拝啓

様々な事例や権威を熱心に引用しながら、誰も否定しようのない事柄を立証する軽薄な論争者に関する先日の記事を喜んで拝見しました。²⁾改まった形の論争はいうまでもなく、コーヒーハウスや偶然居合わせた場での論争の作法を取り決めていただくには貴殿ほど適任者はいません。何卒貴殿のご経験から、賭けをする連中に注目していただけないものではないのでしょうか。論争者についてヒューディブラスが語ったこと³⁾を繰り返す積りはありません。彼の言はまさにその通りであって、ほとんど誰ひとり知らないものがないくらいなのです。ここでは法学院の若者たちについてお知らせしたいと考えます。この若者たちは父親から何不自由なく仕送りがあり、将来のことを考えて必死に勉強する必要はありません。彼らは、(親の言を借りれば)身の処し方を知るためにテンプル法学院に籍を置いているだけなのです。こういった若者の一人に、小生のよく行くコーヒーハウスで見掛けるのですが、非常に騒々しく、人のあげ足を取る人物がいます。この人物は、大変な無知で、本心では矛盾していることに悩みながらも、その気性から抜け出せず、怠惰で無知な生活を送っています。だが、彼は金の力を借りて非常に学識がある振りをします。この不幸は、時折あることなのですが、小生には金よりも学識の方があるということなのです。小生がお話しています紳士は、小生の経済状態に限界があることにつけこんで、小生が読んだと触れ込む本はすべて読み、確信ありげに小生を追い詰めます。そして、非常に強力な論陣をはられ、小生は学識のある人物どころか単なる銜学者に見られてしまう始末です。先だって、小生はタキトゥスでこれこれの一節を読んだことがあると語っていたのですが、この若き紳士はみんなのいるところで急に立ち上がり、財布を取り出して10ギニー賭けると申し出たのです。(別のテーブルでタバコを吸っている人物に向かって)小生の言っていることは全く出鱈目だという訳です。小生は10ギニーありませんので黙りました。彼は情け容赦なく小生が黙り込んだことに喜び勇み、一同に向かって自分はタキトゥスは20回は読んだことがあると言い、逃れられなくなってしまい

1) ホラティウス『書簡詩』1.18.29.

2) 第138号参照。

3) 『ヒューディブラス』2幕1場297-8。

ます。このとき、その中から賭けに応じる人が三人もでます。彼らは彼と張り合える財力があるのです。彼は地理の論点に5ギニー、ワイト島は半島であるという点に2ギニー、地球は丸いという点に3ギニー賭けます。このコーヒーハウスに出入りする紳士の一人に古代のスキャンダルに詳しい人物がいますが、若き論争者は、歴史的な事柄、つまり、面白おかしく語る人がいるのですが、カエサルはカトーの妹⁴⁾と寝なかったという点に、この紳士に20ペニー賭けました。

ロンドンには、相手方が学識に匹敵する財力がない場合には、政治、歴史、数学、その他あらゆる学芸にこの種の賭けをする輩が多く存在します。どうか貴殿のお力添えで、若者たちには知識をこのように楽しんで入手させないようにしていただきたいものです。他の人には多大の時間と努力がいることなのですから。

敬具

1711年8月12日、テンプル法学院近くのコーヒーハウスにて

拝啓

コーヒーハウス中に響き渡るようにオペラ曲を声を出して歌ったり、口笛を吹いたりする若い紳士がいます。どうか、コーヒーハウスではまるで誰もいない部屋でもあるかのように振舞う権利はないのだということをこの若者に知らせてやって下さい。裁判の日はある⁵⁾のですし、路上で歩行を妨げたり、法廷で弁論を妨げたりできない衡平法があるのですから、公の場を確保し、口笛を吹く人、歌手、弁士を認定し、その役割を逸脱しないようにしていただきたいものです。観察者殿、私はこういった輩は貴殿が乗合馬車で出会った大尉と同様の不法侵入者だと考えます。そして、相談役エフレイムに同感です。⁶⁾なるほどこの若者は裕福であり、この俗物が言うように、誰のことも気にかける必要はありませんが、自分の意のままいたるところで口笛を吹いていい道理がないのも確かです。

敬具

追伸

私はテンプル法学院内に事務所を開いています。ここにはオーボエを練習する学生が何名かいます。法学院の幹部員のみなさんにはお願いですが、管楽器⁷⁾に堪能な弁護士諸君の部屋をテムズ河畔に移して貰いたいものです。

4) 小カトー (95-46B.C.) の義妹で、ルクルスの妻セルヴィリアのこと。プルタルコス『小カトー伝』24.2参照。

5) 使徒行伝19章38節。

6) 第132号参照。

7) 1711年8月20日のステイプルズ・イン、リチャード・ウィッシュウエルの手紙では、彼らは「ロバの鳴き声とか狂った牛の鳴き声をまねているようで、辺り一帯に大変な騒音を撒き散らし迷惑至極だ。もし彼らが貴方の警告を無視するようなら、テンプル法学院の管楽器のグループにでも合流してもらいたいものだ。」と歌唱クラブへの苦情が述べられている。

前略

私はある若い女性のグループに属してしまして、時間の大半を共に過ごしています。そこで余儀なく男性の金銭ずくの気質に巻き込まれてしまいます。私たちのところへ、みんなが気にかけているある年配の独身男性がやってきます。この人物は裕福で、誰でも手に入れられると分かっています。それゆえ、特定の人物に絞り込まずに、とても無作法になるのです。彼の楽しみは、戯れることにあります。突然キスをしたり、首筋に振れたり、扇をひったくったり、リボンを取ったり、手紙を奪ったり、書類を覗き込んだり、その他ありとあらゆる作法に外れたことをするのです。そういう訳ですので、この手紙を活字にさせていただき、もし彼が近々私たちの誰とも結婚しないのであれば、私たち一同は、今度彼が陽気に振舞っても、彼に敢然と立ち向かい、彼の地の道化に扱うことに同意しているのだと知らせてあげて下さい。女性一同になりかわりましてお願い申し上げます。何卒宜しくお願いします。

早々

前略

私をはじめとしまして、女性の読者の何名かは、私たちが身につける服装にいたるまで、貴方が示されたルールを遵守しています。私たち誰もがペティコートは昔の手頃な大きさにしています。もっとも中はまだキルト風のものにしていますが。これは私たちもまんざら流行に疎くはないのだというしるしなのですが、それもこれまで観察者殿に酷評されていない範囲に限られているのです。ところで、殿方は私たち女性のピラミッド状の巨大な形をまねて、私たちのやり方を密かにお認めになっていらっしゃるようです。殿方の当世風のコートの裾は、私たちのペティコートと同じくらい大きくなっています。ペティコートが鯨の骨で補強されていますように、コートもワイヤーを用いて両脇に垂れ下がるひだを支えています。私の了解していますところでは、殿方の帽子は、私たち女性のかぶりものに釣合うような形で縮小しています。私たちの姿は目に付きますが、殿方の容姿に対する数学的な処理は認め難いものがあります。殿方の建築物は単にゴシック風であって、女性よりも粗悪な特質を露呈しているだけです。従いまして、貴方が同性をえこひいきなさるのでしたら、私はこれからは考え方を改めたいと思っています。

早々